

ほつかいどう NIE 通信

Newspaper in Education



発行 北海道NIE推進協議会

〒060-8711 札幌市中央区大通西3丁目6 北海道新聞社内 ☎ 011-210-5802 FAX 011-210-5826

開会式が午後のため、午前中は三内丸山遺跡に行つた。ガイドの方から話を聞き、遺跡をゆっくり見学することができた。約5千年前の縄文時代に北海道とも



全国大会に参加して

中札内小学校教諭 相馬 高

交易しており、十勝産の黒曜石の矢じりなどがたくさん出土、直徑1mもの栗の

新聞の魅力を再確認

木を建材に使つていたこと、いまの海・山の幸のほとんどを食べていたことなどがわかつてゐるという話を聞き、縄文時代の人たちの知恵や行動力に感銘を受けた。

世界のためにつながる」という話を興味深く聞き、新聞の良さを改めて感じた。

2日目の公開授業は4年生の国語「新聞を作ろう」を参観した。新聞を読み、良い所を見つけ、アドバイスし合つたあと、ゲストティーチャーの記者の講評と

最後の、新聞づくりを振り返る感想では、児童の1人が「新聞はみんなで読んでもらうからつくることがわかりました。みんなと新聞をつくることができて楽しかったです」と言つた。「新聞づくりは仲間づく

青森でNIE全国大会

大会テーマは「読み解く力からNIE」。震災による被害が過去にならない大きさだったことから、全23の公開授業・研究討議・ワークショップのうち7分科会が直接・間接的に大震災を取り上げ、授業で学ぶ取り組みを紹介した。

このうち2日目の青森市立造道(つくりみち)中1年による公開授業では、瀬谷真美教諭が、東電福島第一原発へ行った、東京消防庁による決死の放水活動の記事を取り上げた。現場の指揮に当たったハイパークスキー隊の富岡豊彦・総括隊長が、地元の風間浦村

第16回NIE全国大会が7月25、26の両日、青森市文化会館などで開かれた。3月の東日本大震災で被災し、復興途上にある宮城、福島など東北各県を含む全国の小、中、高と大学教員、新聞関係者ら850人が参加、公開授業や実践報告をもとに意見を交わした。

読み解く力どうつける

震災テーマに公開授業

出身で、隊員の放射能被爆の危険と任務遂行のはざまで激しく苦悩したことなどを伝えた。大会実行委員長を務めた児玉忠・弘前大教授や、地元の千刈(せんがり)小の大賀重樹教諭、文科省国立教育政策研究所の杉本直美・学力調査官らによるパネル討論が行われた。この中で児玉教授は「新聞は教科書に比べ、情報の鮮度が高く多様。指導要領改訂の、このタイミングをとらえ、新聞と教育界がどう手を結ぶかを考えるべきだ」と提言した。大賀教諭は「ファミリーフォーカ



大会初日のパネル討論で意見を交わす参加者

が「新聞には調べたい、知りたいことだけでなく、いろいろな内容がある。記事との偶然の出会いが新しい扉を開く可能性がある」と話していた。「私が新聞を好きな理由もこれだ」と共感した。

いる」「取材が丁寧」「割り付けが凝つていて」「着目がとても良い」など、それぞれの良さが評価され、新聞に理解することができた。次回の新聞づくりにも確実に生かせるものだつた。

スは、親子が第三者的に話したら「自分だと合える利点がある」と強調。杉本調査官は、「狙いと趣旨をきちんと踏まえた新聞館水産高の山本かおり教諭も実践発表した。「生徒指導に関する問題を考えるには、リアリティのある新聞が教材として役立つ」と国語の教科や生徒指導部便りの編集などに新規的手法を活用し自己表現力を磨く活動を紹介。学校を巻き込んで継続的に取り組む姿勢を評価された。

また、フィンランド事情に詳しい北川達夫・日本教育大学院大学客員教授が初日に講演し、「世界が大きく変化し、情報を取捨選択する力が求められる今こそ、立ち止まって考えるべき。過去を検証し、現在を語る新聞だからこそできる力」と指摘した。

ワークシートを活用

函
セミナー館
的場中で授業公開

当協議会主催のNIE函館セミナーが6月24日、函館市立的場中で開かれた。第10回目の節目の開催で、約20人が参加した。

まず同中の金子賢教諭が1年の国語の授業を公開した。北海道新聞のワーケシート「しようゆのヒミツ」を教材に、味や由来を調べ、その土地ならではの製法、種類により異なる使い方を生徒たちが交代でわか

りやすく解説した。

ムなどを気持ちを込めて書かせる取り組みなどを紹介しました。函館市立榎法華小の深沢昌明教頭は道新のワーケシートを使って東日本大震災で命の大切さを学んだ



NIE実践奮闘記

新聞の良さを生かした実践をしたい。そういう思いで前任校の函館市立五稜中学校で2年間、社会科の授業を中心に実

史に対する生徒の関心は意外と低いという課題があります。

はが中をはと自分たちの住む地域とのかかわりを意識させました。
2年目には、新聞に書かれた内容の読み取りを行いました。

成長期の新聞広告を取り上げたり、石油危機を報じた新聞の1面記事を活用したりしました。2年間の実践をとおして、新

に定着すること。第三に、新聞には事件や出来事にかかわる人物の声や写真が掲載されているため、現実感と臨場感のある学習になり、生徒の興味・関心が高まり理解も

公男報道部長が「マスコミと環境問題」と題して講演。同社で進める温室効果ガス削減の取り組みや、大震災で明らかになつた原発に対する各紙のスタンスの違いなどについて解説した。

1年目は「箱館開港新聞」を用いた実践を行いました。「箱館開港新聞」とは、北海道新聞社が2009年に函館開港150周年を記念して発行したもので、「1850年にもし新聞があつたら」という設定でさまざまな記事が書かれています。五稜中は五稜郭を校区にもち、歴史の舞台になつた地域ですが、地域の歴

熊石第二中教諭



川端 裕介

学生にもわかりやすい内容の「箱館開港新聞」を活用しました。実践をとおして生徒の興味を引き出し、教科書で学ぶ内容

ば、函館の西部地区での「自由の女神」設置問題を取り上げながら、一景観権」という新しい人権に触れ、対立と合意、効率と公正の問題について具体例をもとに考えてみま

感と臨場感があると感じました。

現在の出来事のみならず、過去の出来事の学習の一環で、当時の雰囲気を理解するのに新聞は絶好の資料でした。普段から新聞を読む生徒は限られています。だからこそ、教材としても情報のツールとしても、大きな価値をもつ新聞を活用する必要性を強く感じます。

中の三上久代教諭が青森市でNIE全国大会の概要を報告。札幌市立北九条小の佐藤元昭教諭が新聞写真を使つた3年生の授業について、また、東京福祉大短大部札幌学習センターの南邦彦、清藤貞智子両講師が成人を含む学生たちに行う文章表現指導などについて概要を報告した。

認定校43校決定 全国最多続々

日本新聞協会新聞教育文化部（旧日本新聞教育文化財団）は7月13日に東京で開いた同協会の「博物館・NIE委員会」で、全国の542校を本年度の実践指定校（新聞協会認定校）に認定した。前年比9校のプラスで、学校数では過去最多。うち継続校309校、新規校233校。正規枠が492校で、先進的なNIEの取り組みを行う奨励校

として22都道府県の50校を認定した。都道府県別では道内が東京の35校に次ぐ全国2位の33校（継続校19校、新規校14校）で、前年度より2校増えた。道NIE推進協の独自認定校として短大通信制初の、東京福祉大短大部札幌学習センターを含む11校（前年度11校）も了承された。

協会の認定とは別に、各推進協がそれぞれ認定する本年度の独自認定校は、道内の10校のほか、秋田（10）、広島（10）、京都（5）、岡山（4）など、16道府県の計55校となつた。

道 NIE 研究会（坂田恵三会長）の本年度の夏季研修会が8月10日、北海道新聞本社で開かれた。毎日新聞道支社の鴨志田公男報道部長が「マスコミと環境問題」と題して講演。同社で進める温室効果ガス削減の取り組みや、大震災で明らかになつた原発に対する各紙のスタンスの違いなどについて解説した。また、札幌市立平岡中央中の三上久代教諭が青森市でのNIE全国大会の概要を報告。札幌市立北九条小の佐藤元昭教諭が新聞写真を使つた3年生の授業について、また、東京福祉大短大部札幌学習センターの南邦彦、清藤眞智子両講師が成人を含む学生たちに行う文章表現指導などについて概要を報告した。

思い思いの筋立てで「作文」をまとめる留萌高の生徒たち



留 萌 高

るかにだけ集中させる」と話す。だが、授業では細心の注意も払う。机間巡回でも生徒の意欲を促すことを忘れない。「あなたの作品はいろいろなところで注目されている」「道民全員が読むと思って書いてください」。新聞に掲載された生徒へ送ってきた図書カードなどの伝達など、積極的に顕彰することも教師間で申しあわせ、これが生徒の意欲を見ている。

自主性尊重 引き出す意欲



夏休みの自由研究などにも使えるとあって、児童たちは真剣な表情。サッカー女子ワールドカップで世界一になつた「なでしこジャパン」の記事や夏の行事を中心記事を切り抜いてコメントをつけたり、独創的なレイアウトで台紙に張りつけていた。

夏休みの筋立てで「作文」をまとめる留萌高の生徒たち

新聞の読者欄への投稿で、説得力ある文章の書き方を学ぶ授業が、道北の留萌高で続けられている。教科や単元の合間を使って投稿や懸賞論文に応募させる取り組み。掲載作品を参考に、文を推敲（すいこう）したり、説得力のある表現を考えるなど、生徒たちに自主的に学ぶ力が芽生えている。

(北海道新聞NIE推進センター委員 大井一樹)

投稿重ね表現力養う

内容は国税庁の「税に関する高校生の作文」への応募。1200字以内という規定に従い、イメージを膨らませながら原稿用紙に向かって。わずか30分強だったが、時間内に仕上げる生徒が多かった。

同教諭はこのほか、与えたテーマで300字以内にまとめる北海道新聞の「みらい君の広場」への投稿で、生徒の作文力向上に役立っている。

作文は苦手と敬遠されがちだが、このクラスでは冷ややかな反応を示す生徒はほとんどいなかつた。間を

受け継いできた手法に従つただけで、特段のことはしない。原稿用紙の書きを書かせてきた。「学校がスは1年の時から約2カ月に1度のペースで投稿作文を受け継いできた手法に従つただけで、特段のことはしない。原稿用紙の書き始めの位置など、わずかな点を注意するだけ。自主性に任せ、形式にとらわれず

い、次は自分も、と夢見る健全な競争関係。掲載をゲットを待ち遠しく思う気持ち、良い作品をたたえ合い、自分の考えをストレ



震災考えるガイド発行

日本新聞協会はNIEガイドブック特別号「授業提案 3・11大震災新聞で考える」を発行した。被災地を含む全国の小、中高校教諭が、震災にかかる新聞記事を

分析して、問題をテーマにした文章による授業展開も可能だ。ワークシートを掲載している。仙台市在住のNIE教育コンサルタント渡辺裕子さんと河北新報社員のつづった震災体験記をもとにした指導案もあり、主観の入った生々しい文章による授業展開も可能だ。

A4判、32ページ。1部105円で販売している。問い合わせは協会経理担当☎03・3591・4403へ。

スクラップ新聞 小中学生が挑戦

夏休み親子教室

小、中学生が家族と一緒に記事を切り抜き、「自分に記事を切り抜く」のスクラップ新聞をつくる「夏休み親子新聞教室」が8月1日、札幌市内の北海道新聞本社で開かれた。

小さいうちから新聞に親しまれてと当協議会が昨年から始めた。今年は札幌などの35組約80人の児童、生徒と保護者が、はさみやのり持参で参加し、日下部憲一コ

ーディネーターと市内の6教諭を指導役に朝日、読売など3紙の当日朝刊から好きな記事や写真を切り抜い

た。夏休みの自由研究などにも使えるとあって、児童たちは真剣な表情。サッカーワールドカップで世界一になつた「なでしこジャパン」の記事や夏の行事を中心記事を切り抜いてコメントをつけたり、独創的なレイアウトで台紙に張りつけていた。

父兄と一緒に、自分ならではの切り抜き新聞づくりに挑戦する兄弟

弘前大学教授
児玉 忠

3

こだま・ただし 専門は国語科教育。主な著書に『高等学校文章表現の授業』(渓水社 1997年)、『見つめる力・発見する力を育てる児童詩の授業』(銀の鈴社 2011年 編著)などがある。1962年、上川管内鷹栖町生まれ。



タイガーマスク現象 「報道のされ方」

みなさんは、今年の正月以降、新聞などマスメディアをにぎわせたできごとに「タイガーマスク現象（運動）」があったのを覚えてい るだろうか。「伊達直人」を

名のる人物が、全国各地の児童養護施設などにランドセルをプレゼントしたというのできごとだ。まだ記憶に残っている方も多いだろう。

当初、ほほえましくも心温まるニュースだったはずの、このできごとも、新聞がたびたび取り上げるにつれ、日を追つてその様相を変えた。果ては「伊達直人」以外のアーティストの主人公を名のつた寄付が行われたこと、が報じられたり、保健所に保護され飼い主のいない動

この頃から、多くの読者は新聞を中心とするマスメディアの功と罪について考え始めたはずだ。たしかに、報道のおかげで、あまり光の当たらなかつた児童養護施設という存在に注目が集まり、全国各地で善意の寄付が集まつた。

しかし、寄付の送り手や送られた品の目新しさにばかり注目した報道をしたために、今回のできごとがも

で起きたい観点といえる。ところで、学校などで習わなくては身につかない外國語と違い、母語としての日本語は学校で学ばなければいけば身につかないというようなものではない。日常生活のなかで自然と身についていくものである。

そのため、母語としての日本語は、とくに意識して学ぼうとしなくとも身についているという感覚が私たちのなかにはある。しかし、ほんとうは相手や目的、場面や表現方法など、

編集後記

○…最後の書店が姿を消して7カ月、留萌市に「街の書店」が戻ってきた。市民グループの誘致にこたえた三省堂書店が地方では珍しいブックセンターを開設した。

「地域の朗報」を留萌高の増子優二教諭から聞き、学校を取材した帰りにのぞいてみた。明るい店内、真新しい棚に新刊が並び、関係者が忙しそうに開店準備を急いでいた。

○…10年ほど前、道央の滝川市で書店がなくなる、同じような場面に遭遇した。最悪の事態は回避されたが、文化のともしびが消えゆく寂しさを味わった。道内では地域を支えていた個人商店を飲み込んでいった大型店がどんどん倒れ、地方都市はどこも恐ろしいほどの疲弊ぶりだ。

○…同時に教育や文化の形成・維持がますます困難になっている。旧来の活字文化に変わって生まれる、新たな枠組み。地域の教育と文化を支える意味でも、学校と新聞の出番がいっそう求められているのかもしれない。（大）

教材に いると思つてゐる。 まさに母語（日本語） のような存在である。 し、タイガーマスク現 「報道のされ方」が示

などを活用して得た情報を持ったこと(第2学年)、「論説や報道などに盛り込まれた情報を比較して読むこと(第3学年)」といった内容が示されている。これらは、こうした知識やスキルを身につけるための言語活動例である。

見市立・鶴小・渋谷涉教諭▽津別同南中・高橋学教諭▽江差・檜山セミニナー(9月21日)▽公開授業 日下部憲一コーディネーター江差町立南が丘小6年▽実践報告 江差高・岩間洋之論ほか

「べき本来の意義が薄れ、マスメディアに注目されることが目的であるかのようない過性の流行事象のようになってしまった。このことを通して多くの読者は、「報道された事実」よりもその「報道のされ方」を意識したように思う。

こうした経験は、新聞記事を教材化するヒントを与えてくれる。それは、新聞記事を教材化する観点として、「報道された事実」を教材にするだけでなく、その「報道のされ方」を教材にするということである。とくに国語科学習指導、な

ひるがえって、新聞を中心とするマスメディアについても、同じようなことがいえるのではないかと、私は考えている。新聞も雑誌も、空気や水のようにあつて当たり前の存在であり、新聞・雑誌の読み方、テレビの見方、ラジオの聞き方などは、とくに学ぼうとしても、自然と身についている。母語（日本語）を正確に理解したり適切かつ効果的に表現するにはそれなりの知識やスキルが存在する。

るよう、新聞などのマスメディアには、取り上げた事実をそのように報道する目的や意図、方法や形式があり、ほんとうは、私たちはそれを理解したうえで新聞を含むマスメディアと向き合う必要がある。それは、マスメディアといふものと有意義につきあつていくためであり、私たちが不透明なこの時代を生きていくための知識やスキルを身につけるためでもある。

9月のセミナー 北見と江差で

9月のセミナー

お知らせ